

四十にみたずして身まかりぬ、その子母のをしへによりて、身をたて人にまられたり、時の人此やもめを貞婦とよびて、ほめあへりける、

〔妙海物語〕妙海法尼は堀部彌兵衛女にて、其名を順と云、彌兵衛の養子安兵衛に、妻合すべき約諾せるうちに、赤穂落去故、十九歳の時剃髮、父略中吉良家に恨み報すべき前に至り、安兵衛江戸の上方へ登り、祖母に對面を乞しかば、祖母人をして申出さるゝは、何用ありて歸り來りしぞ、主君の御用に立ん爲にこそ養子にもいたしぬ、祖母や妻に逢たく心迷ひ歸りたるらん、え對面申べきやといひ出しければ、安兵衛秘事はあかしがたくして、全く未練の心にて歸り來りしにあらす、御疑ひあらば誓詞を奉るべしとて、頓て誓詞に血をそゝぎて出しければ、祖母玄からばあふべしとて、順妙海に向ひ、安兵衛歸りしなり、逢ひたきやと申故、順いかにも逢ひ申たきといひければ、見度は眼を抉りぬき出し候へ、見すべしといひしに驚き、順もあふまじと覺悟いたしぬ、すでに奥の間へ入れ、襖を閉て、祖母ばかり對面して、別れ際に、肌著二ツ取出し、是は彌兵衛と其方、今はの際の時に、著用の爲に縫ひ置たり、臆に遣すとて、渡しわかれしとぞ、

〔窓の須佐美追加〕浪花の富人の子小四郎とて、わか者有、娼妓と相なれ、終に買得てかくれたる所におきて、行かよひ妻としけり、父是を聞て大にいかり、かゝる事なす者、行末許がたしとて、追出しければ、かたへなる小家を借りて、夫婦在けるが賤きわざは馴ざれば、しばしの中に衰て、朝夕の烟も絶々になり行ければ、したしき友どちあはれがりて、いたはりけれど、それもかぎりなければ、方にをよびがたく、如何せむといふうちに、一人の云、かくては復潰に及びなん、此ごろ丹波の笹山なる富家に、女一人持たるが、養嗣を望者有、此かたへ往てんやとす、むるに、小四郎は我身を立んとて、妻を流浪させん事、本意にあらず、思ひもよらずと云、その妻物陰にて是をき、立出て云様、此日比わらは故、夫の漂泊ある事、かへすゝ、悲しく、夜の目もあはず居申なり、此ま